

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 堀田 和義

祭式儀礼を重視したバラモン教とは異なる、沙門（出家修行者）の宗教として紀元前5世紀頃に台頭した仏教とジャイナ教の間には、思想、修道システム、用語などの面で様々な関連性があり、インド宗教史における仏教の位置付けや特異性もジャイナ教との比較分析によって、いっそう明確になる可能性が以前から指摘されていた。しかしジャイナ教研究は原典の解読自体が立ち遅れているため、大きな成果が期待される両宗教の比較研究もあまり進展していない。

こうした状況下で本論文は、バラモン教で祭式主催者の潔斎儀礼だった *upavasatha* が、両宗教の修道論では「布薩」として受容され展開した点に注目した。仏教の布薩 (*uposatha*) が五戒に衣食住の節制3ヶ条を加えた八齋戒（在家信者の生活規範）全体を指し、かつ出家者の戒律遵守を促進する一儀礼も布薩と呼ばれたのに対して、在家信者の修道体系（シュラーヴァカ・アーチャーラ=SA）の確立に積極的だったジャイナ教では、布薩（初期聖典では *posaha*）はもっぱら SA の一部に組み込まれた形で展開した。その事情は夙に R. Williams (1963) が明らかにしたところであるが、ジャイナ教の聖典文献には言及せず、原典の裏付けも必ずしも明確ではなく、またその後新たに出版された SA 文献も少なくない。そこで本論文では、40点以上の空衣派（裸行派）SA 文献の精査を中心に、白衣派の初期聖典一部と SA 文献 15 点をも含めた関係資料の分析を通じて、Williams (1963) の徹底的な洗い直しを図った。序論と結論を含む全5章の第1部本論と、空衣派 SA 文献の代表作『ラトナカランダ・シュラーヴァカ・アーチャーラ』(RK)の訳注研究である第2部とから成る。

SA 文献の分析に先だって第2章では、Williams が扱わなかった白衣派のアンガ聖典を用いて、布薩はジャイナ教の初期聖典の段階でも、断食をともなう何らかの在家信者の誓戒（仏教の戒律に相当）であった可能性を文献実証的に示した。また在家のまま出家者の厳格な修行に倣い解脱達成を目指した実践形態としての布薩の内容説明を整理している。

第3-4章では、第2章の成果を踏まえつつ、総計60点近くに及ぶ空衣派 SA 文献と白衣派 SA 文献の該当資料を分析して、ジャイナ教在家信者の生活規範における布薩の位置付けを解明した。その上で、布薩に関する諸規定を実践日、期間、場所、実践内容、違反行為、目的・効能の6項目に分類し、空衣派と白衣派の記述内容の異同を各資料間の微細な相違に至るまで克明に分析した。この作業を通じて堀田氏は、Williams が両派の布薩の諸項目に関して概説している説明が、どの程度、実際の資料に即した正確な記述かを逐一検証し、多くの点で重要な補足と訂正を行うことに成功している。

本論文は Williams (1963) の徹底的な洗い直しを軸とし、膨大な関連資料の分析と論旨明快な論述を通じて、ジャイナ教の布薩に関する総合的な研究として着実な成果を上げ、13 版本の異読情報を網羅した RK の本邦初の全訳とともに、ジャイナ教において在家信者が占める位置付けを、仏教と比較考察しつつ明らかにするための重要な基礎を確立した。仏教の「布薩」概念との比較検討が乏しい点などは惜まれるが、上述した本研究の画期的な意義を決して損なうものではない。審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。